一、能恵姫物語

弘治元年[註1]四月（天正二年か）岩崎城主藤原三郎道高に一女が生れ能恵姫と名付けた。乳母はかねてより信用厚い栗田五郎智学法印の妻女サワであった。お姫様が生れて百日ばかり過ぎた頃より、どうしたものか昼夜のさかいもなく泣き続けるので、法印は心配のあまり斎戒沐浴して白藤明神[註2]に泣止めの祈願した。折柄乳母は夏の暑さに耐えかねて姫を抱いて庭の松の木の下へきた時、不思議にもピタリと泣き止んだ。そしてスヤスヤ寝入ってしまった。ふと何気なく見れば松の根本に卵形の石があり、手に取って見ると、光沢世の常でない綺麗な石であった。これを道高公に捧げると、大いに喜ばれて、早速姫の守石とした。これより姫の機嫌はよく、健かに育っていき、三歳になったある日、女中とともに庭に出て遊んでいると美しい小蛇が現われ、ジッと姫に見とれていた。その後は毎日のように姫のあとを追い、そこここと這い廻っているので、女中が戯れに小蛇に向い、姫の用便を片付けてくれれば、やがて大きくなった暁にはお前のお嫁様にしてやるといった。それから後は姫が庭に出る度毎必ず現われ、傍を離れずに汚物を喰い去り、何時も綺麗に片付けた。

元亀元年[註3]（天正十八年か）姫も十六歳になり美人のうわさも高く、縁談が多かったが、増田土肥次郎道近の媒酌で川連城主の嫡子桂之助と婚約が整い、引越しの日取りも十一月初丑ノ日ときまった。いよいよ婚礼の前日になると、姫が部屋に引籠り終日出てこなかった。その日は城下のサガリ淵の水が殊更鮮かに無気味に光り輝いていたが、誰も気付かなかった。婚礼当日は一片の雲もない晴天であり、荷物も送られた。城中藤の間で目出度く盛大に嫁やりの式を挙げ、いよいよ出発となって、家臣を初め女中に至るまで別れを惜しみ、美々しく飾った行列は、城を出て皆瀬川に差しかかり、川中まで渡った時、一天俄かにかき曇り、黒雲は濛々と湧き上がり咫尺を弁ずることができず、電光閃々として雷鳴を伴い、疾風雲を捲き濁流漲り、アレヨ〳〵と見る間に一陣の竜巻がサッと起き、姫の駕籠はどこへか行方知れずになってしまった。

城主はこの悲報を聞いて悲嘆にくれ、大騒ぎとなり、四方を探せども姫の行方は知れなかった。川連城へ急使を走らせ、事の次第を告げ、力を合わせて八方探し求めたが、古内村に打ち捨てられた空駕籠のみ見つかっただけであった。

姫を失った岩崎、川連両家の悲嘆は言語に絶するばかりであったが、川連ではせめてもの慰めにもと嫁のいない淋しい仮祝言を行ったのであるが、乳母サワの嘆きはまた一しほで、ついに床に伏してしまったのは哀れであった。

翌年二月庭の桐の枝が雪に折れたので、城主は智学法印に命じ古枝を伐り払わせた。法印が淵に臨んだ桐木によぢ登って、腰の鉞を取出し、まさに一撃を加えようとした時、鉞が手より辷り落ちて淵に沈んでしまった。淵を望み見れば水清く川底の小石の上に鉞があるのが見えた。水にはいって取ろうとすれば、鉞がひとりでに少しずつ退き手が届かなくなった。また追えばまた逃げるで、数回これを繰返しているうち次第に深淵に沈んでしまった。思わず水に潜り込めば、アラ不思議、何時しか別世界に出てしまった。あたりを見廻すと大きな岩窟があり、そこに能恵姫が佇んでいた。そして法印を手招ぐかのように見えたので、夢かとばかりにうち喜び駈寄って、如何にしてここにおわすかと涙にむせんだ。姫は岩屋の中に法印を誘い『汝が如何に誘えども二度と再び両親にまみゆることができない身の上となった。あれを見られよ』と指さすを見れば、そこに大蛇が蟠って眠っている。姫は「過去の因縁か、大蛇に見込まれてかくの如き境遇になってしまった。このことを汝に知らせんがためわざわざ鉞を落させたのである」と、鉞を取り出して法印に渡し「さらば妾はこれより竜神に仕え、人々の水難を除き国土の護りとなって身の罪業を滅す」といい、櫛笄[註4]を渡し、これを川連蔵人殿へ形見の品として渡してくれといって、奥に入ろうとするので、法印がサッと姫の袖を摑むと、姫は竜神が目を醒しては大変と、身を翻えす途端に、袖がちぎれて法印の手に残った。止むなく片袖と櫛笄を手に帰ろうとすると、淵の岩上に立っている自分に気がついた。

この話を聞いて相模守を始め城の者共は皆不思議に思い、形見の品々を川連に送り届けた。

川連では姫の菩提のため一宇を建立し、近くの増田山満福寺の二世食室師を聘し祭り、河秀山竜泉寺と称し、姫の霊を弔ったという物語である。

なお相模守道高は城の一角にある水神社を再建し姫の霊を合祀し、御供田、鈴振田、笛吹田の三か所を附置き、春秋二回の祭典を仰出されたと伝えられている。

川連町高橋利兵衛文書

竜泉寺は天正七年藤原相模守道高菩提所として建立、闍寐と云ふ僧を置き、旦那は相模守である。二代全意和尚は庄内より移り、其時の年号は天正十四（十八年か）旦那は藤原蔵人道助といふ城主、云々。

天正十八年の検地騒動で川連城主嫡男桂之助が最上勢に捉われたため、能恵姫がなげいて投身自殺したことを物語化したのが、能恵姫物語であり、川連竜泉寺由来でなかったかと見られる節がある。桂之助の後日物語につき、

増田町　田中隆一氏蔵

寛永十九年壬午十月台命に因て小野寺桂之助道白[註4]を出羽の湯沢に幽せらる。

晦日湯沢に着す、三十人扶持を賜ふ。二十年癸亥十一月八日道白湯沢に卒す。嶽竜山長谷寺に葬る。法名駿邦院骨眼桂徹。

其子桂之助道国承応二年癸巳六月赦免を蒙り永く家臣となる。隠居の後桂隠と号す。

桂之助道白の二男長大夫道俊も其父兄と共に湯沢に幽せらる。承応癸巳に兄道国と共に赦免せられ御家臣となる。

註1、弘治元年―西紀一五五五年。天正二年―西紀一五七四年

註2、白藤明神　岩崎公園にある明神様。水神様

註3、元亀元年―西紀一五七〇年。天正十八年―西紀一五九〇年。

註4、小野寺桂之助は川連城主で天正十九年検地騒動に最上にとらえられたため能恵姫物語を生んだのではないか？この後高田右馬之助が川連の城代家老となっている。